患者の日本語と医師のドイツ語——1930年代の症例誌の構成

鈴　木　晃　仁

今日は茶話会にいらしてくださり、どうもありがとうございます[(1)]。今年から教鞭をとることになった鈴木晃仁です。今日の議論は、次のようになります。

1．導入－症例という史料と外国語
2．王子脳病院（1901-1945）の日本語・英語・ドイツ語
3．九州帝国大学の日独混合語
4．医師のドイツ語と患者の日本語
5．展望

1の導入で大きな歴史の中で医療における言語の問題を概観し、2～4は日本語とドイツ語が存在する幾つかの場面を示します。この部分では、20世紀中葉の精神病院の症例誌のなかで、王子脳病院という精神病院では、ほぼ全面的に日本語が用いられ、時々英語やドイツ語が入る標準形A、同じ時期の九州帝国大学では、医師が日独混合語を用いている標準型B、そして九大医師がドイツ語を記し患者は日本語を話し、その双方が記録されている特別型の三種類を検討します。最後の展望では、症例誌で二つの言語が共存することがどのような意味を持つのかに触れます。

1．導入：症例という史料と外国語

20世紀の後半に興隆した新しい医学史は、人文社会系の学問の多くの分野に広まっています。「新しい医学史」というのは、研究者の教育分野に注目した言い方です。医学を学ぶことを背景にしたものを「古い医学史」、人文社会系の視点から医学・医療を学ぶものを「新しい医学史」という意味で使っています。私が知っているイギリスを例にとると、歴史学部はもちろん、思想、文学、社会、芸術や音楽、文化、倫理、環境などにおいて教育されたことが新しい医学史です。また、より狭い意味での人文系だけでなく、社会科学系の学問も広めると、法律、行政、経済などの広大な領域に広がっています。

より具体性を持たせるために、医療は＜疾病と患者と医療者の三者＞が作り出す、といいます。疾病・患者・医療者の三者に分けると、話がわかりやすいです。これがヒポクラテス文書で言及されることもあり、「ヒポクラテスの三角形」と呼ぶこともあります。

疾病・患者・医療者の三者がどのように振舞ったのかを記録したものを「症例誌」と呼びます。少なくとも理想としては、古代ギリシアのヒポクラテス文書から始まり、中世から現代まで医師が疾病と患者の事例を、患者一人ずつ記録しています。また、日本においても、近世の医師たちが毎日のようにつけていた記録の中で、患者一人ずつ、何が起きたのかを記録することが、一つの理想形でした。ヨーロッパでは2,500年以上、日本でも1,000年以上という非常に

長い期間にわたって、医師たちが、患者一人につき一つの症例誌をつけてきました。

日本の症例誌の中で、興味深い数十年があります。20世紀初頭から中葉までです。それまで日本語と中国語という二つの言語が存在したのに対し、日本語とドイツ語の二つの言語が存在するようになりました。もちろん英語が使われている場合もありますし、ドイツ語を省略して「ムンテラ」と呼ばれた俗語もあります。しかし、理想だけでなく実践においても、日本語とドイツ語が混交してつくられていました。この事態について、少し拾い始めた幾つかの事例を紹介し分析してみようというのが今日の発表の軸になります。準備があまりできていない主題ですので、色々とご批判をいただければと思います。

２．王子脳病院（1901-1945）の日本語・英語・ドイツ語

私がこれまで研究してきたのは王子脳病院です。東京の北区西ヶ原にかつて存在した私立の精神病院です。1901年に設立され、1923年の12月に全焼しました。しかし、そこから発展して昭和戦前期には全盛時代を迎えました。しかし、1944年・45年に食料不足、結核による死亡の増加、そして東京大空襲における木造部の全焼という惨劇があり、多くの患者が死亡して、廃院となりました。

不思議なことですが、その焼け落ちて廃院となった病院に、数多くの史料が残されています。1923年と1945年の二回の全焼がありましたが、かなりの量の史料です。その中で最も数多く残されているのが7,000件を超える在院患者の症例誌です。これは数百箱、あるいは1,000箱を超えるかもしれない膨大な史料です。アーカイブズ学の専門家にお願いして、現在整理しています。

この症例誌の一つ一つが三つに分かれています。病床日誌という医者が記録したもの、看護日誌という看護婦・看護人がつけた記録、そして体温表と呼ばれている体温、体重、月経などが記録されたものです。さらに、よく付属するのが処方箋です。その患者が何を服用するのかという指示です。かなりの省略が多く、正直言って、読みにくさを感じている記録です。もうひとつの、比較的よく発見されるものが、患者が書いた記録です。手紙、詩、ちょっとした挿画などが症例誌に挟まれています。

王子脳病院では、症例誌の記録のほとんどが日本語で書かれています。朝鮮人の患者を除くと、患者の多くや、患者の家族たちが日本語を話すということが中心になりますし、大学のような教育機関ではないので、医師たちがドイツ語を積極的に練習する必要もありません。王子脳病院は日本語を主たる標準形として使っていました。

この規則が破られる場合を二件見つけました。一つは外来患者で英語が用いられた例、もう一つは入院患者でドイツ語が日本語と混用されているというケースです。外来の患者は、1923年に外来でやってきた22歳の女性患者、職業は小学校の教員です。生まれた家は地方でも３代にわたって校長をつとめた名家です。そのような患者が自分はこうであったということを日本語で伝えましたが、それが英語に訳されて記録されているという例です。医師による自分の英

語の訂正、ドイツ語を試してみる事例なども含めて、以下のような記録になっています。

［資料１］

Statement of the patient

My brother is single and does not like to succeed father's business, which is the teaching. When my father resigned from his post (principal) a new teacher came to take his place. ~~She~~ I used to go back home with the new principal thinking that ~~his her~~ my father told ~~her~~ me to do so. I thought he told me something very suggestive. He gave me 50 sens without any apparent reason. Something what he did and said seemed to me to have something to do with me. He seemed to ~~ho~~ favor me great deal. One time I though father ~~mentioned~~ referred to the relationship between myself and the teacher ("You must have been tired because of your love with the excessive love affair with the new teacher") Most everything seemed to me awful suggestive.

I imagined that father told me to buy a watch and next day ~~it~~ I surprised to find ~~s~~ the new teacher brought a new watch. In spite of the opinion of others that I am insane I do not think so, because it is definitely certain and suggestive.

I tried to find out if the teacher really loved me. The teacher said ~~though~~ through a certain official of the village that he earns for me great deal and loves me in spirit. He comes to the station to see me off and said something very significant.

I have many good suitors including an university student. My mother wants me to get marry with some one else but I do not know what I am going to do. I have no sexual relationship with the teacher.

As for the love affair I had a sweat heart when I was in Normal school but he ~~married~~ being married I ~~did~~ have not had any other experiences of love affairs."

She seems to <u>misinterpret everything</u> to suit her own delusion. Her interpretation seems to be grounded upon very vague ~~bases~~ and uncertain bases. Delusions are all centered around the marriage affair and nothing else.

Notions concerning other things are quite normal, although her train of thought is

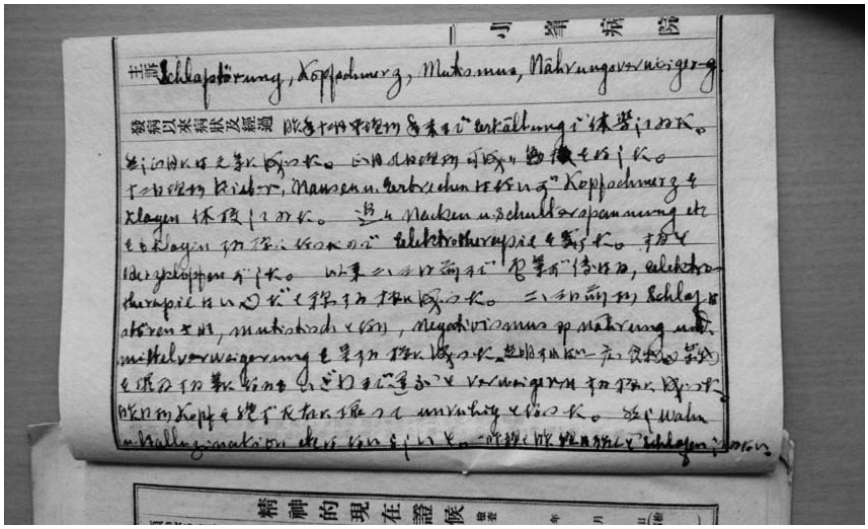
rather "umständlich". No insight into her own condition.

Menstruation began when she was about 15 years of age. Had longing to-ward the opposite sex when in high school. Real insight into sexual intercourse with man occurred to her since Sept of this year. She says she does not know how she became to get this knowledge but says probably from her brother who always mentioned something sexual in his talk.

このように全体が英語で書かれた文章は、一つの「病歴」であり history になります。さらに、この記録を見ると、多くの訂正や書き換えを含み、当時の医師たちにとっては、かなり高い英語力が要求される文書です。

それよりも比較的優しいのが、日本語とドイツ語の混用です。「比較的優しい」と言いましたが、かなり難しいことも事実です。これは、帝国大学の医学部を卒業して臨床で学ぶ過程で身に着ける言語の訓練です。これを書くことができると一人前というものです。そこで、通常の王子脳病院では日本語で書かれる部分に、ごくまれに、日本語とドイツ語の混合文が用いられる記述があらわれました。以下のような画像と書き下ろしになります。

［資料２］



［資料３］

Schlafstoerung, Kopfschmerz, Mutismus, Nahrungsverweigeung

昨年12月中頃より年末まで Erkaeltung で休学していた。

しかし正月には元気になった。正月９日頃よりかなり勉強をなした。

12日頃より Fieber, Nausea und Erbrechen はないが Kopfschmerz を
klagen 休校していた。追々 Nacken u. Schulterspannung etc
をも klagen する様になったので、Elektrotherapie を受けた。すると
herzkloppen がした。以来二、三日前まで電気が伝はる、Electro-
therapie はいやだと称するようになった。二、三日前より Schlag は
stoeren され、Mutistisch となり、Negativismus, Nahrung- und
Mittelverweigerung を呈するようになった。説明すれば一応、食物や薬物
を摂取する気になるも、いざ口まで運ぶと、verweigern するようになった。
昨日より Kopf を絶えず左右に振って、unruhig となった。しかし Wahn
u. Halluzinazion etc はないらしいと。一昨晩と昨晩は殆ど schlafen していない(2)

これは日本語とドイツ語が混合で使われています。資料２を見れば、オリジナルが混合であることは明確です。また、それを活字化した資料３も、日本語とドイツ語が用いられています。これを日本語にすると、私たちには分かりやすくなりますが、オリジナルから離れるという特徴もあります。

［資料４］

不眠症 , 頭痛 , 無言症 , 栄養拒絶
昨年12月中頃より年末まで風邪で休学していた。
しかし正月には元気になった。正月9日頃よりかなり勉強をなした。
12日頃より発熱 , 吐き気と嘔吐はないが頭痛 を訴えて休校していた。追々 首と肩の張りなどをも訴える様になったので、電気療法を受けた。すると心悸亢進がした。以来二、三日前まで電気が伝はる、電気療法はいやだと称するようになった。二、三日前より衝撃は蓄積され、無言症となり、否定症、○、栄養と薬を拒絶 を呈するようになった。説明すれば一応、食物や薬物を摂取する気になるも、いざ口まで運ぶと、拒絶するようになった。昨日より 頭を絶えず左右に振って、不安 となった。しかし 狂気と幻覚はないらしいと。一昨晩と昨晩は殆ど眠っていない。

これは、現在の私たちにとっては、資料２はもちろん、資料３よりもはるかに分かりやすい資料です。理由は、資料３が日独混合であり、資料４がほぼ日本語だからです。王子脳病院は、標準形としてはほぼ日本語の症例誌であり、英語だけにする場合と日独混合にする場合がごくまれな例外として発見されます。

３．九州帝国大学の日独混合語

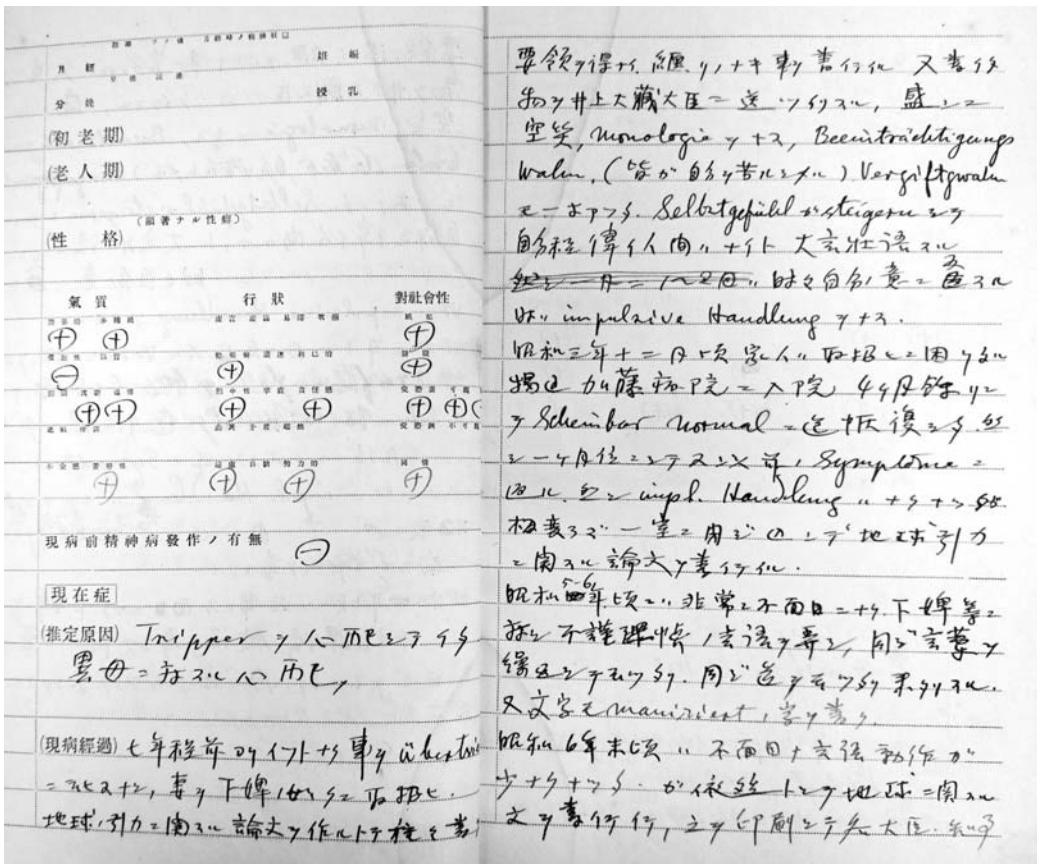
日本語だけから大きく離れ、日独を標準形とするものが、九州帝国大学の精神科が採用して

いる症例の文法です。この精神科の原型が設立されたのは1906年でしたが、きちんとした帝国大学の医学部らしい症例誌が整理されて、そこに記入されたものが保存されるようになったのは1931年です。これは、東京帝国大学を卒業し、慶應義塾大学の教授であった下田光造（1885-1978）が、1925年に赴任して学生たちを訓練したことと関係があるだろうと考えられます。その多数の症例誌が、年ごと・疾病ごとに一つの大きな冊子となって、一千を超えるのではないかという冊子群が整然と九州大学の文書館に寄付されました。そして、1931年から戦後のかなりの時期まで、日本語とドイツ語の双方が用いられる時期が続きました。

この日本語とドイツ語の混合は、さらに二種類にわけることができます。日本語とドイツ語のバランスの問題であり、安定した混合スタイルと、ほとんどドイツ語といってよいようなものがあります。前者は、さきほど王子脳病院で紹介した、日本語とドイツ語が混合した形で、後者は、ほぼ純粋にドイツ語で、稀に日本語が入る文体です。

前者の画像はこのようになります。1932年の男性患者の病床日誌です。見開きの左ページの下から、これまでの経緯が語られます。ここで、日本語とドイツ語が混合されて利用されていることが分かります。画像の下には、患者の日本語の一部をドイツ語に変換した文章を並べました。[　] の中には、私がドイツ語を日本語に変えて掲載してあります。

［資料５］


月經　妊娠
分娩　授乳
(初老期)
(老人期)
(性格)
氣質　行狀　對社會性
現病前精神病發作ノ有無
現在症
(推定原因)
(現病經過)

［資料６］

７年程前よりいつとなくことを übertrieben［大袈裟に］言い又なし、妻を下婢のごとく取扱い、地球の引力に関する論文を作るとて様々書く。容量を得ない纏りのなき事を書いている又書いた物を井上大蔵大臣に送ったりする、盛んに空笑、Monologie［独り言］をなす、Beeinträchtigungwahn［妄想性狂気］（皆が自分を苦しめる）Vergiftungswahn［毒を盛られることへの狂気］も一寸あった。Selbstgufuehl［自意識］が steigern［高まる］して自分程偉い人間はないと大言壮語する然し、~~一月に１～２回は~~時々自分の意に反する時は impulsive Handlung をなす［衝動に走った行為］。

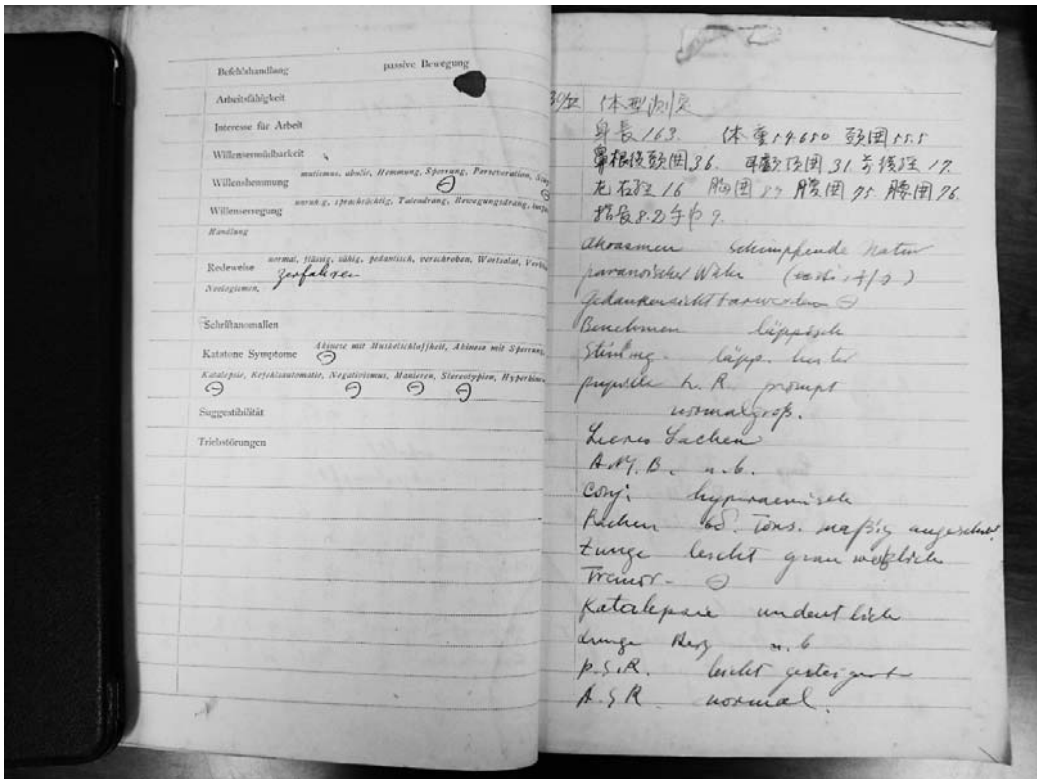
昭和三年十二月頃家人は取り扱ひに困りたる揚句、加藤病院に入院４か月餘りにて Scheinbar normal［見かけ上は通常］に迄恢復した然し一か月位にして又以前の Symptome に返る然し impl. Handlung はなくなったが相変わらず一室に閉じ込んで地球引力に関する論文を書いている。

昭和５-６年頃には非常に不面目になく下婢等に対し不謹課慎の言語を弄し、同じ言葉を繰返して言ったり、同じ道を云ったり［行ったり］来たりする又も文字も manieriert［癖のある］字を書く昭和６年末頃は不面目な言語動作が少なくなったが依然としてして地球に関する文を書いていて、これを印刷して各大臣知事に送るべく目論んだ

ここで資料５と資料６で提示した部分は、資料２と資料３で提示した部分と同じパターンを持ち、日本語とドイツ語が混用されています。おそらく、下田光造が東京帝国大学で呉秀三（1865-1932）に学んだ日独混用の文体であろうと感じられます。

一方、同じ症例誌でも、日本語とドイツ語の混用の一つのモデルが終わると、次のセクションではほぼドイツ語だけが用いられる局面になります。資料５、資料６の患者と同じ人物の症例誌は、最初の混合部分が終わったあとは、次のような図版（資料７）と、それを活字化した部分（資料８）になります。

［資料７］



［資料８］

30/V 体型測定

身長163　　体重54650　　頭囲55.5

鼻根復頭囲36　　耳〇頂囲31　　前後経17

左右経16　　胸囲89　　腹囲75　　腰囲76

指長8.2　　手幅９

Akoasmen Schimpfende Natur

paranoischer Wahn（地球の引力）

Gedanken sichtbar werden －

Benehmen laeppisch

Stimmung laepp. heiter

Pupille L.R Prompt

Normalgross

Leeres Lachen

A.M.B.　n.b.

Conj: hyperaemiele

Rachen 68 Tons. Massig angeschrebt

Zunge leicht grau weisslich
Tremor –
Katapelsie undeutlich
Lung, Herz. n.b.
P.S.R. leicht gesteigert
A.S.R. normal

資料７と資料８は、ほとんどがドイツ語です。冒頭の身長体重などを記録する日本語と、「地球の引力」と書き込んである部分以外は、ほぼドイツ語だけで構成されています。そのドイツ語は、確かに分かる単語もありますが、医者でない人々には非常に難しく、A.M.B. や P.S.R. の三文字での略語などは、それが何か分からないというのが私にとっての最初の障害現実でした。大宮先生に教えてもらいながら、やっとわかるようになった部分が大きいです。まだ間違いが多いのかもしれませんが、これを日本語だけにすると、以下のようになります。

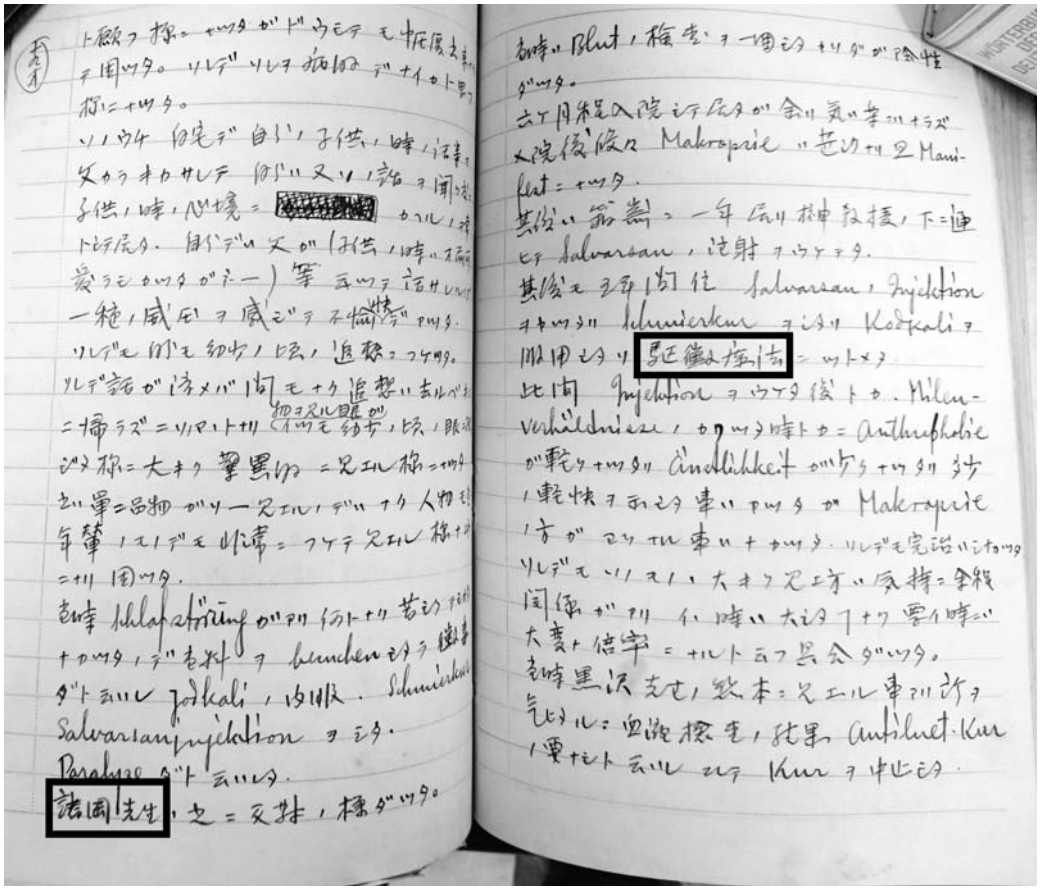
［資料９］
幻聴はののしるような特質である
パラノイア性の狂気であり、地球の引力がそれにあたる
考えを明確にする能力は低い
行動は子供じみた愚かさがある
気持ちは子供っぽい明るさがある
瞳孔は左右正常で大きい
空虚な笑い
加齢性黄斑変性症は別条なし
結膜に充血
咽頭は○○で適度な大きさ
舌は軽い灰白色
筋肉の振戦がある
カタレプシーは不鮮明
肺と心臓は別条なし
膝外腱反射は軽度の増大
アキレス腱反射は通常

４．医師のドイツ語と患者の日本語

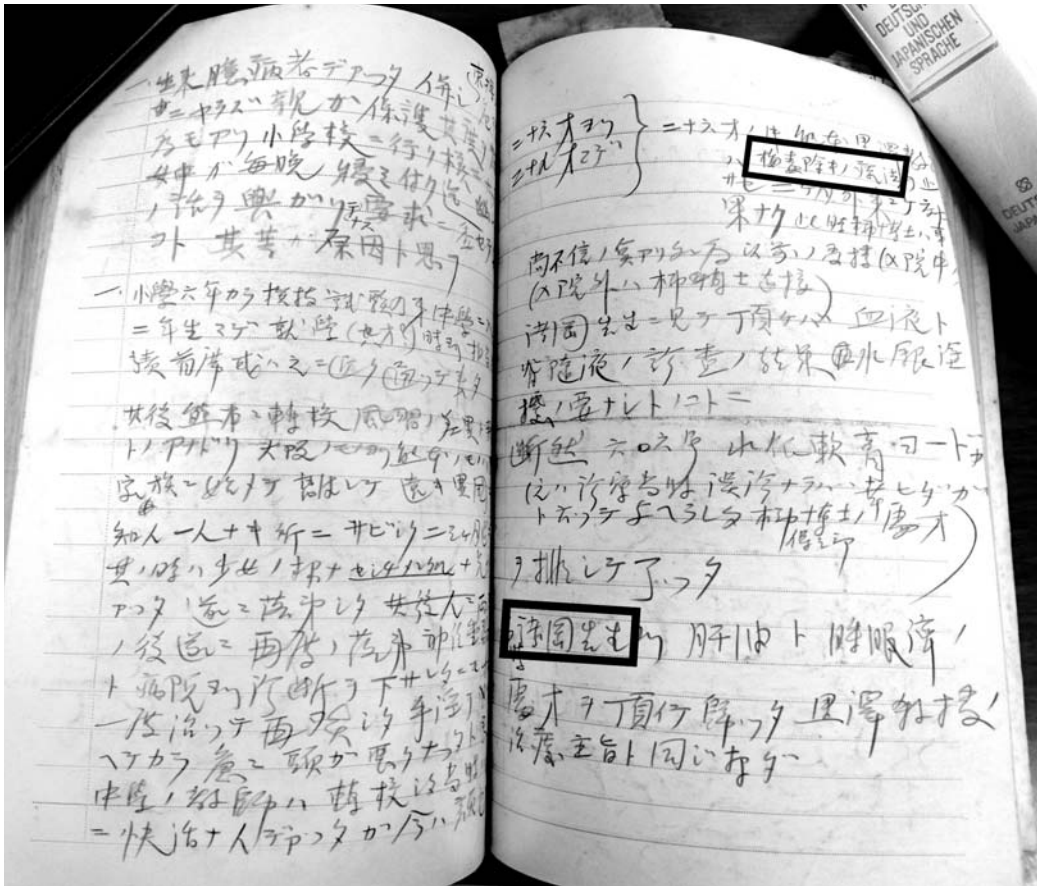
これまではドイツ語と日本語の二種類の言語を見てきました。その言語の二種類性に、医師と患者という二人の個人の関係性を重ねることができる資料が現れることがあります。これ

は、一つの症例誌の中に、二種類の文書があり、それらが同じ状況を語っていて、片方は日独混合スタイルできちんとした字体で書かれ、もう片方は、日本語で粗い字体で語られています。また、細かい部分を丁寧に読むと、患者の日本語に基づいた描写は、九大の教授に対する多少の怒りをこめているのに対し、日独混合スタイルでは、怒りが和らげられたような表現がとられています。二つの文書の似た部分をまとめると、このようになります。

［資料10］



［資料11］



資料10と資料11はいくつかの点で違い、幾つかの点で共通点しています。まず、資料10はきちんとした字体の日独混合、資料11は粗い字体の日本語であるという違いをもっています。一方、内容はかなりの共通点を持っています。資料10と資料11では、「諸岡先生」と梅毒に対する治療について、どちらの文書にも描かれている部分を示しました。「諸岡先生」は、九州帝国大学の精神科の助教授であった諸岡存（1879-1946）です。また、資料10と11の筆跡ですが、丁寧かメモかの違いだけで、両者はとても似ていると考えられます。色々なことを考えると、資料11はある医師が患者の話を聞いていたときにとった日本語のメモであり、それをもとに、その医師が日独混合の記録にしたのが資料10であるというのが 実際の流れであったと考えられます。

5．展望

症例誌と日本語と外国語という問題は、私としては考え始めたばかりです。いくつかの要因

を考える必要があります。長い伝統における、医学・医療における日本語と中国語の共存は重要であるかどうか。明治維新以降において、医学がより急速にドイツの大学から医療を吸収したか。それを日本に移動するときに、患者のほとんどが日本語を話すという状況が、ドイツ語を話すドイツの症例誌とどのように違うのか。ドイツにおいても、周辺のドイツ語を話さない地域で精神医療を行うことはもちろん存在し（クレペリンのドルパトが有名です）、そのような状況と日本はどう違うのか。あるいは、アメリカ合衆国やヨーロッパ各国において、ドイツ医学を吸収した国家は多いが、それらの国家と日本の状況はどのように違い、どのような共通性を持つかなどの多様な問題を立てることができます。

あるいは患者の視点から見ることもできます。疾病について医師たちがところどころにドイツ語をはさんで会話をしている世界を、患者たちはどのように見ているのか。また、このドイツ語の優先が崩れていき、科学と技術と有効性が重視されていったとき、患者たちは何を考えたのか。比較的短い期間ですが19世紀末から20世紀中葉は、患者にとっても重要で特徴があるものでした。近現代の医学と医療の歴史の重要な部分が、言語関係の中で開いていくように感じています。

註

（1） この茶話会トークは、2021 年 10 月 14 日に文学部・人文社会系研究科の教授会メンバーを対象として行われた。

（2） この引用を含めて、ドイツ文学の大宮勘一郎先生に数多くの訂正をいただいた。